

米欧亜回覧

第76号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

十月二十六日全体例会

「岩倉使節団はどんな西洋知識をもって米欧回覧に向かったのか」平川祐弘氏の講演

「和魂洋才の系譜」、「西欧の衝撃と日本」などの著作がある平川祐弘先生に、岩倉使節団のメンバーがどのような西洋知識をもって旅に出たのかという視点からお話をうかがうことになった。福沢諭吉の「西洋事情」や中村正直の訳した「西国立志編」などが幕末の志士たち、明治国家づくりに邁進する青年たちにとどのようなインパクトを与え、旅の成果にどんな影響を与えたのか、比較文化史の碩学に学ぶ絶好の機会、多数の参加を期待します。



新島襄肖像画の前で全体例会
7月26日・同志社大学東京オフィス

七月全体例会開催

盛夏の京橋で、企画会議風に：七月に十六日、京橋の同志社大学東京オフィスの使節団の一員である新島襄の肖像画が掲げられている会議室で開催された。

講演会はなく、「岩倉使節団と『米欧回覧実記』をもっと多くの人に知らせよう！」をテーマにした拡大企画会議風の例会であった。まず、過去の周年記念事業が吉原幹事作成のスライドショーで紹介された。続いて、使節団と『実記』を知らせる新しい企画として基本型ができてきたi-Cafeの報告が、担当の岩崎・植木両幹事からあり、多田幹事が作成したi-Cafe-musicの八分間のプロモーション動画が上映された。小野幹事から、設立二十周年記念事業を視野に入れた「i-project20」について、DVD「岩倉使節団の米欧回覧」の巻末「(アルバム)岩倉使節団の群像と周辺の人々」に収載されている百三十六人を題材にした人物論の出版企画の提起があり、事務局の古俣さんがまとめたスライドショーを見ながら主要な人物を確認した。最後に、泉代表の総括と意見交換が行われ、当会の今後の進展にとって有意義な例会となった。

(詳細は二頁参照)

新年会は一月十日(土)

使節団に関連する楽しい音楽会の企画

大変好評だった二〇一四年の新年会「音楽で巡る岩倉使節団の旅」に続き、来年の新年会の企画が、岩崎・植木両幹事を中心にすすめられ、早くも大枠が固まりつつある。

日程は一月十日(土)、会場は前回と同じ有楽町の日本外国特派員協会(外国人記者クラブ)で、岩倉使節団ゆかりの音楽会が開催される。

使節団はボストンの大平楽会でヨハン・シュトラウス指揮の音楽会を体験、その後ウィーンを訪れた頃にシュトラウスは喜歌劇「こうもり」を作曲中であった。このように岩倉使節団と関わりが深いシュトラウスの歌劇を題材にパロディ風の楽しい新年会の演出が練られている。ご期待ください。

今から一月十日の日程をメモしておいてください。

(詳細は三頁参照)

このところ 創立二十周年記念事業の企画について、大小いくつかのミーティングが行われているが、そこではいろいろのアイデアが浮上している。その中に、「岩倉使節団記念館」の構想が芽生えてきた。「ええ！記念館？ど

の場所には？ 資金は？」と声が直ぐ返ってくる。．．．。ところが、「場所も資金もいらない。ハードでなくソフトでやるのだ」との声。つまりバーチャル空間でやるというのです。

夢ではないミュージアム？ 「岩倉使節団記念館」

泉 三郎

に飛んで思い通りの情報に接することができる優れたものなのだ。これは、鈴木商店の親睦組織である「辰巳会」が中心となり、全国の鈴木商店愛好家を組織し想いを寄せる人たちがボランティアで制作したという。

この記念館は実に素晴らしい。岩倉使節団を素材にすれば、いろいろの展開が想像できる。明治維新の後、岩倉使節団と留守政府、明治国家の形成過程等々、それに関連して諸々の人物を描いていけば、明治日本の全体像を立体的に鳥の目でも虫の目でも自在に見ることが出来ることになりそうだ。

た人物だが、最近、「鈴木商店記念館」なるミュージアムを発見したという。それは現在の大商社「双日」の前身、日商岩井のそのま

本を担う青少年に益すること大なるものがあると思う。今日のIT時代では、コンテンツさえあれば「博物館」でも「美術館」でも立派にできあがってしまうのだから驚きである。我がシニア世代も勇躍して、この夢にチャレンジしてはどうだろうか。

第72回 全体例会

「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」を
もつと多くの人に知らせよう！
設立二十周年記念事業を視野に入れて

七月二十六日、京橋の同志社大学東京オフィスにて第七十二回全体例会が開催された。当会が二年後に迎える設立二十周年にあたり、「岩倉使節団」「米欧回覧実記」をもつと多くの人に知らせる具体策を全員で検討しようという趣旨で開催され、三十名が出席した。会場は新島襄の肖像画が正面にある部屋で、司会進行は近藤事務局長。

まず、泉代表の挨拶で趣旨説明と新しく幹事に加わった吉原重和氏、多田直彦氏の紹介があり、続いて部会報告が行われた。

周年記念事業の紹介

新幹事の吉原氏が作成したパワーポイントを上映しながら



吉原幹事政策の映像で記念事業を紹介

泉代表が、当会の周年事業を中心に振り返った。

◇二〇〇〇年・設立五周年
「岩倉使節団派遣百三十年レセプション」、記念事業「国際シンポジウム」の開催と「岩倉使節団の再発見と今日的意義」の出版

◇二〇〇六年・設立十周年
記念事業「国際シンポジウム・世界の中の日本の役割を考えるー岩倉使節団を出発点として」の開催と出版

◇二〇一二年・設立十五周年
記念事業「小論集・岩倉使節団と米欧回覧実記」の出版

新企画の報告

新しい企画の報告と活用についての意見交換。まず、江古田で成功裡に開催された「i-café music (三回シリーズ)」の紹介がコアメンバーの岩崎洋三、植木園子両幹事からあ



i-caféを報告する岩崎幹事(右)と植木幹事(左)

り、非会員二十名が参加しその内三名が会員となったことが報告され、新幹事の多田氏が作成した八分のプロモーションDVDが上映された。



プロモーション動画のバックには植木さん・金子さん連弾の「80日間世界一周」が流れる

また、岩崎氏から八月、九月に日比谷図書文化館で実施された「i-café-lecture」および十一月、十二月に予定されている「i-café-music」のシニア版の紹介があった。

二十周年の記念事業について

二年後の設立二十周年記念事業を見すえた「i-project20」について、小野博正幹事から「

岩倉使節団の群像とその周辺の人々(仮称)」という出版企画の提起がなされた。これは、DVD「岩倉使節団の米欧回覧」の最後につけられて

いる「岩倉使節団の群像・日本人百名」(使節団本体、各派遣理事官・随員、同行留学生、岩倉使節団が海外で出会った日本人の写真付き解説)と外国人三十六人を素材にした人物論で構成する、当会ならではの壮大な企画である。事務局の古俣美樹さんが作



岩倉使節団の群像 日本人100名

古俣さん作成のパワーポイントでDVD収録の100人を全員が確認

成した全百三十六人のパワーポイントを上映し、泉代表が主要な人物の解説を行い、使節団や周辺の人々には、まだあまり掘り下げられていない興味深い人物がたくさんいることが紹介された。その上で、関心のある人物・テーマ、調べてみたい人物・テーマについてのアンケート用紙が配布された。

最後に、泉代表がホワイトボードを使いながら総括し意見交換が行われた。

当面はすでにモデルができていいる「i-café (ミュージック&レクチャー)、少人数の対話型カフェ(サロン、茶会)を基本として、多くの会員がそれぞれの場や機会でレクチャーができるようにしていきたい。その素材やテキストは多くあり、人材も豊富であるから中長期の課題である「i-project20」の出版企画について



白板を使った泉代表のまとめ

は、色々なアイデア、コメントが考えられ、大いに議論したが、基本的には「岩倉使節団」「米欧回覧実記」という当会のアイデンティティを軸にしていきたい。

その他、企業での新人研修や中高生を含む若い年代に知らせることの意義。出版の手段としては電子出版の方が発信力が高いのではないか。出版やシンポジウムを行うには、期間的に企画委員会を早く立ち上げるべきだ。など、多くの意見が述べられた。



意見を述べる庵原幹事(左) 小野幹事(右)

終了後の懇親会は京橋「はなの舞」で行われ、議論・意見交換が続いた。



i-café-lecture (8月25日 日比谷)

i-café-lecture・日比谷図書文化館 盛会裏に終了

一回目を三月二十七日に実施した後、i-café-music・江古田クライネス・ウィーンのため中断していた、日比谷図書文化館でのi-café-lectureは二回目を八月二十五日、三回目を九月三十日に実施し、好評のうちに終了しました。

同館でi-Cafe-Lectureを実施したきっかけは、展示「和魂洋才」関連セミナーで「久米邦武と吉田東伍」を聴きに行き、ナビゲーターの森田健太郎氏のレクチャーが大変要領を得ていたので、同氏世話役の同館ナイトセミナーに通い出したことでした。しばらくして、同氏からナイトセミナーで岩倉使節団のDVDを上映して欲しいと云われ、望むところと三月に歴史好きのセミナー会員十数名に米国編を上映してもらいました。DVDの映像が美しく、泉さ

んのナレーションが分り易く、岩倉使節団の功績を良く理解出来たと評判良く、二回目以降開催の自信に繋がりました。その後、泉さんにもお出ました。その後、同図書文化館とコラボの可能性を探りました。

二回目は、米国編再上映と英仏編を一挙上映し、解説を泉さんに、三回目は独・露・伊その他編で、解説を山田さんお願いしました。ナイトセミナー会員も約十名、涼川会(慶応商学部OB勉強会)の五名参加もあり、両回とも定員二十四名の部屋が満席になりました。

各回とも活発な質問・意見交換で盛り上がりましたが、毎回近隣の中華レストランで開催した二次会にも多くの参加者が参加し、アルコールでなめらかなになった舌で議論は一段と弾みました。

(文責) 岩崎 洋三
新年会はヨハン・シュトラウスの喜歌劇「こうもり」風に!

来年の新年会は一月十日(土)に今年(二〇一四年)と同じ有楽町の外国人記者クラブで開催されます。

幸い、声楽家、ヴァイオリニスト、ピアノリストなど、素敵なプロの音楽家の賛助快諾を得て来年も楽しい音楽会が

可能になりました。そして、有志でDVDを観賞しながら検討の結果、「ヨハン・シュトラウスの喜歌劇『こうもり』を題材とすることになりました。『こうもり』のストーリーは復讐劇ですが、「全てはシャンパンのせい、乾杯乾杯!」とハッピーエンドになるところや、何をやっても許される「劇中劇」などを当会の新年会に借用したら面白いことが出来そうです。

岩倉使節団はボストンで、二日間通った大平楽会(World Peace Jubilee & International Music Festival)のハン・シュトラウスの指揮振りを見てますし、使節団がその後ウィーンを訪問した頃は、シュトラウスが喜歌劇「こうもり」を作曲中だったという因縁もあります。

乾杯合唱の場面に「Fii Chorus」が登場すれば、一段と盛り上がること疑いなしです。早めに楽譜を用意しますので、みなさまの積極的なご参加をお願いします。

(文責) 岩崎 洋三
☆新会員自己紹介☆
新たに会員となった方の自己紹介です。

村尾正昭

未来はためらいつつ近づき現在は矢のように早く飛去り過去は永久に静に立っている

ドイツの詩人であり思想家のシラーが残した言葉です。岩倉使節団の米欧亜回覧は日本国民にとって「永久に静に立っている」業績に違いありません。私は昨年四十年余の会社員生活を卒業し、現在は孫たちの成長を楽しみに自由な日々を過ごしております。岩倉使節団の有する今日的意義についても考察していきたいと思っております。

窪田巨弘

元より語る履歴無く一言で充分。退職後、それ迄できなかった好きな遊を楽しむ年金生活者。次に入会の想い。ちつとも将来が見えない今の日本。米欧亜に学んだ明治とその後何も学ぼうとはせぬ日本。まるで別人。先の大戦に限らず、大きな過ちに気付いた震災原発も元の木阿弥。何も変らぬ現状批判はさておき、何をどう変えるべきかを考える時、団塊生れにやわらかな戦前を理解、頑迷固陋を解きほぐく機会に接せられたい。

容應 萼

中国で生まれ、香港で育つ。十六歳に留学のため日本にやってきて、それからシシィンガポール七年、アメリカ七年以外はずっと日本で生活しています。専門は国際関係論で、明治期の日中関係史を

【お知らせ】 久米美術館で「寺崎武男 心の故郷イタリヤ展」開催中

岩倉使節団がヴェニスで資料を発見した天正少年使節団を生涯のテーマとした寺崎武男の展覧会が久米美術館(JR目黒駅前)で開催されています。中でも六曲一双に描かれたヴァチカンとヴェニスの風景画が圧巻です。

- ご一覽をお薦めします。
- 開催期間：二〇一四年十一月十六日(日)まで(月曜日休館)
- 入館料五百円(一般)

「人的移動」という切り口で研究をしています。博士論文は明治期日本の中国人留学生をとりあげ、いまは十九世紀後半の中国人学生と日本人学生の米国学史に取り組んでおります。二〇〇二年秋から一年間イェール大学で長期海外研究の機会を得、ニューヘイブンを舞台として繰り広げられた日本人留学生とアメリカ人、中国人留学生とアメリカ人、さらに従来の研究においてほとんど取り上げられなかったアメリカ人が接点となった日本人学生と中国人学生の交流関係の考察をはじめました。



歴史部会報

担当幹事 小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■小ナポレオン
といわれた男
山田 顕義(講
師:泉三郎氏)

六月二十三
日開催。

岩倉使節団に
は未だ知られ
ざる人物が少
なからずいる
が、山田顕義
もその一人で
ある。幕末の

戦争で武勲を挙げ、用兵の奇才といわれ、大村益次郎を継承する人物と囑望されたが、山縣有朋が軍政の主導権を握り、傍流を歩むことになる。当時は二十八才であったが、陸軍少将の地位にあり兵部省派遣の理事官として岩倉使節団に参加することになる。幕末以来陸軍はフランスの指導を受けていたので、山田もパリを拠点にして学び、時に欧州各地を巡覧しながら軍事視察に精励した。使節団がパリを訪れたときは、木戸孝允との交流が殊の外密で、思想的にも心情的にも共鳴するところが多かったようだ。そのため木戸の旅行先にもしばしば出向いて交歓している。山田は軍事天才として民法典の編纂者ナポレオン一世を崇拜し、これからは「武の時代ではなく法の時代だ」と、法に関心の重点を移してい

く。小柄ながら才気縦横で小ナポレオンとも渾名された。帰国後、一万五千字からなる建軍策を提出したが、そこには次のような文章がある。「兵何を以て至要なるや。兵は凶器なり。而して能く巨万の金額を費やし、人民を勞し、少壯の事業を妨げ、その学問を礙し、その性を障害し、その才を束縛し、その刑罰を厳酷にし、或いはまた醜業に慣習し、密陰を盛んにし、梅毒を繁殖す。しかるにいわんや大砲銃諸器も上は頂上より下は跛底まで、人体軍用諸物、ことごとく皆外国に仰ぐに於いておや—中略—今日、文明の世に於いて無用なるものは兵か。しからず兵は抵抗の器なり。人抵抗の気あれば武勇なかるべからず。また軍事なかるべからず。人生欠くべからざるものは、文武なり。国また然り」

この建言書は明治国家の形成には取り入れられず、「幻の建白書」といもいわれている。山田は「兵を敵対抵抗の器なり」とし、必要悪としての軍隊の本質を衝き、徴兵制についても教育を先にする漸進論を掲げ、山縣の進める徴兵制に異を唱えた。

その結果、山田は司法畑に転じ、伊藤の組閣した内閣では初代司法大臣に就任、その後四代の総理大臣の下で八年

にわたり大臣の職にあり民法、商法の整備に挺身した。また、一方で教育に力を尽くし、日本法律学校(日本大学の前身)や國學院大學の創立にも関与した。教育重視の面でも木戸の衣鉢を継いだといえる。その思想の根底には、自然の摂理を尊ぶ「天地生成の意」の思想があった。視察先の生野銀山で卒倒し急死、四十九才だった。(泉三郎)

森鷗外(講師:池央耿氏)
七月二十二日開催、出席者十五名。
池氏は、三百冊余の翻訳を様々な文体で書分けている。それは、森鷗外が明治期に、翻訳を通じて様々な文体の日本語を創成してきたことと似ている。鷗外は雅文体、美文体の『舞姫』『文づかい』『うたかた』、超翻訳の『即興詩人』(アンデルセン)、乃木將軍殉死を契機に、幾多の歴史小説を生む。池氏は鷗外作品を実際に読み比べながら解説され、作品により文体を変え、新しい日本語を創り、翻訳と西洋文学の紹介と創作で、明治のあらゆる文学者に影響を与えたという。

『むくどり通信』(明治四十五(大正五)で、鷗外は一人グーグル的発信をしている。ドイツ新聞数紙を購読し、片端から脈絡なく翻訳し、書き連ねた。時代の観察者で時代の体現者だった。そして、森林太郎として死んでいった。

『夢物語』の今日性—もう一つの徳富蘇峰論(講師:半澤健市氏)
九月十六日、出席十五名。
三月の吹田会員による蘇峰論が、蘇峰の全生涯、特に前

半を論じたのに対し、半澤氏は、原稿用紙二千八百枚に及ぶ徳富蘇峰著『敗戦後日記』(講談社刊、2006年)を材料に、蘇峰の「大東亜戦争」の敗戦論を考察した。敗戦に衝撃を受けた上、蘇峰は東京裁判のA級戦犯容疑者とされたが、八十三歳という高齢と病気を理由に巢鴨収監を免れ、山荘に籠もり「大東亜戦争」の敗因・戦争責任・占領に関する日記を執筆した。敗戦は、軍部・官僚・政治家の戦略と統制の欠如、昭和天皇の指導性不足、国民の戦意低下によるというのが蘇峰の敗因認識である。戦争を、米英の日本包囲に対する自衛戦争とみたから、戦争責任は敗戦責任であり、東京裁判検察側の日本は侵略者という論理に反対する。

皇室中心主義者であり、自由主義・民主主義を排した蘇峰にとり、GHQ占領による「皇室思想」の廃止は革命的事件だった。しかも国民は一夜にして占領政策協力に転換した。この体制順応に失望しながら蘇峰はこう対応した。東西冷戦激化を予想し国内外の左翼勢力を次なる敵とした日米協力を指向する。報告者は、吉田満、伊丹万作、日高六郎による戦争論を示して蘇峰見解の相対化を図った。蘇峰を「常に時代に

随伴した機会主義者」であつたと結論した。

報告後、「日清・日露戦争の同時代者が大東亜戦争を十分認識できたか」、「戦中に蘇峰は戦局の実態をどこまで知っていたのか」、「一世紀の中で言説変化を機会主義と総括するのは酷ではないか」、「ジャーナリストが時代に随伴するのは当然ではないか」、などの疑問や反論があった。(文責) 小野 博正

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事 塚本 弘



hiroshi.tsukamoto@eu-japan.jp

■今、日本から世界に向けて何を発信すべきか—ロ・エー・ゴメの視点から(講師：小野博正氏)

六月十四日、出席十八名。

GJ研の成果の要約は、人類の向かうべき方向は「人間中心主義、西洋的母性原理、近代(国民国家)を超越して、いのち中心主義、東洋的母性主義、宇宙地球学的視座での共生が必要」であり、西洋的絶対思想から、東洋的相対思想への転換とも言え換えられる。

では、どうすれば物質文明、進歩主義、国民国家という西洋文明崇拜の根強いリアリズムから脱却し、世界の過

半数を占める一神教的原理主義の人々に、多神教的、共生利他の精神を納得させようか。人類は六万年前に東アフリカから世界中に拡散した元は同じ兄弟であること。人間も動植物も地球も星も宇宙のあらゆる物質も、同じ素粒子が生死循環して生成していることを知り、各民族、国家、宗教も元を糾せば、皆より良く、平和に生きるためのよすがに過ぎないことを知れば、共通点が見えてこないか。

夫々の国、民族、宗教の多様性を認めつつ、人類の新たな未来創造のための、『日本は世界の静かな中心であれ』とのテーマで、二つの提案をした。『憲法九条を世界遺産に』と『これからはゼロ成長を目指そう』である。

前者は、日本の真の世界貢献は、解釈改憲で自衛隊を戦争に参加させることではなく、本来の日本国憲法が持つ、「万一侵略者が現れようとも、戦争を未来永劫に放棄して、非暴力、無抵抗に徹する覚悟」の趣旨に戻り、それを世界遺産にすることで、退路を断ち、世界にその意義を主張することこそ今の日本が取るべき道ではないか。

後者は、成長至上主義では、もはや地球は資源や環境で永続しない。実際、日本や欧米先進国では、もはや欲し

いのは物ではなく、より心満ちたりた生活だ。開発途上国は、あるレベルまで成長路線は認めざるを得ないが、先進国が今後も成長路線を続ける限り、後進国もどこまでもついてこざるを得ない。ゼロ成長とは成熟社会の証で、今後は実質生活の美味を争う社会でありたい。(小野 博正)

日本の教育を考える—中等教育・高等教育の各国比較から(講師：大森東亜氏)

七月十二日、出席十二名。

報告は文科省の資料などを基に各国の中等教育・高等教育を概括し、日本の教育を検討する素材提供を企図した。

中等教育では学力と教育水準の向上が課題とされ、アメリカでは国や州の教育課程の基準を明確化し共通に学ばせようとする一方、一般的な教育施策に飽き足らず地域の父母や企業、教員などが主体となつて、チャータースクールが公立校として普及、この考え方がイギリスにも波及。中等教育は英・パブリックスクールとともに、米国でも私立を中心に発達してきたのに対し、仏、独ではリセ、ギムナジウムなど公立中心。日本は、中等教育は公立中心であった。

高等教育の中心である主要国立大学への進学者は私立の割合が増えていると推定され

る。社会の健全な発展を考えた場合、公立の中等教育学校(中高一貫校)を拡充し、私立の一貫校とバランスをとっていくことが求められよう。併せて実業教育のあり方もドイツなど各国の長所短所に学びながら見直しを進めたい。いづれにしろ教員の処遇改善に努め、教育に意欲ある人材を集めることが望まれる。

高等教育には各国とも国際競争力の強化、新しい時代の開拓のため、より知的な分野での貢献を求めて日本ではCOEによる研究拠点大学支援が推進される一方、ドイツや中国でも同様のエリート大学化を図る。各国とも学生数の規模拡大に伴い学生に配慮した高等教育財政の見直しに苦慮している。市場至上主義の世界にあつて地球社会に相応しい経済、社会のあり方を示せるのは大学をおいてないと考えられ、その意味で教養教育のあり方は各国共通の課題と思われる。(大森 東亜)

生殖医療・その倫理と社会的影響(講師太田裕子氏)

九月十三日開催。

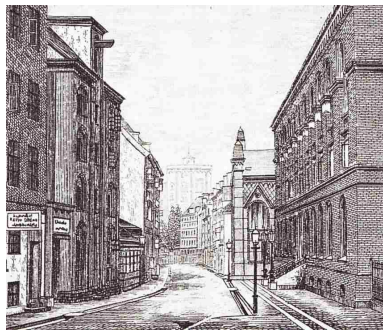
以前は「不妊治療」と呼ばれていたものが、昨今のめざましい医療技術の進歩により、今では「生殖医療」と称されるようになった。あくまでも、自然の生殖過程の再現であつたものが、夫婦に由来

しない卵子、精子、胚、子宮の組み合わせを駆使して様々な形の生殖を可能にしている。当然、これに伴う様々な問題もおきてきている。

第一に、母と子に健康上のリスクを負わせる可能性。第二に、卵子、精子、胚の商品化。第三に、親子関係。夫婦間の不妊治療でない場合、子のアイデンティティ、家族関係の崩壊、遺伝病の予測不能の可能性、近親婚の可能性。第四に、障害を持つて生まれてきた場合の養育。第五に、女性の晩婚化。生殖技術の発達で、妊娠、出産がいつでも可能、という誤解が、生じかねない。自分の卵子を凍結保存する例さえでてきている。第六に、医療費の増大。

現在、卵子、精子、胚提供による生殖医療、さらに、代理懐妊に関しては、産科婦人科学会の見解や会告として自主規制されている程度で、法律上の決まりはない。日本国内でも、一部の医師により実施されている事実があるし、海外渡航による実施は、野放し状態である。

問題の解決のためには、医学のみならず、人々への妊娠、出産についての正しい知識の啓蒙が必要であるし、社会的、倫理的議論がなされたうえで、早急な法的整備をのぞみたい。(太田 裕子)



コペンハーゲンの市街 (実記)

実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp



■第百八十四回

七月十日開
催。

例年、橋本吉信さんのご厚意で映像を見る会が開かれてきたが今年私が名乗りを上げた。使節団は、米欧亜を回覧して「富国強兵」を確信し、各地で

格差のある社会の裏面も見てきた。あれから百数十年後の「いま」はどうかと、オリバーストーンが語る「もう一つのアメリカ史」を観た。アメリカは強引に戦争へと突き進んだが、イラク戦争は大失敗に終わった。

歴史家アーノルド・トインビーの言葉に「全世界の人々は何らかの形で相互破壊を拒否するために団結しなければならぬ。その指導原理は古代ペルシア帝国を措いて他にはないのである。」というこ

とで「ゆるやかな支配」―帝国内の諸民族には寛容な政策―が実行された「ペルセポリス」の映像を確認した。

更に、ジョセフ S・ナイ・ジュニア(著)『国際紛争―理論と歴史』にある「国際関係における倫理の限界」を読んだ。紛争の回避は、先ずは私利私欲の排除であり、「倫理の限界」を超える大きなハートが必要ということだ。次いで、「格差はどこまで許されるのか?パークアベニュー」シリーズ「真実に迫る」。加速する富の偏在の映像で格差の「いま」を確認した。大富豪は政治献金で自分たちに有利な法律を作らせ、収入を得ると更に政治に金を

つぎ込んでいく。戦争にも軍事産業からの政治献金はつきものである。アナン国連事務総長は1999年のダボス会議で企業にグローバルな課題解決への参画を求め、世界の経営トップにその取り組みを促した。その内容を集約したものが「国連グローバル・コンパクト十原則」に行き着いたのである。

「いま」は「国連グローバル・コンパクト十原則」に行き着いたのである。

■第百八十五回

九月十一日開催、出席者十一名。第67巻『デンマルク国

の記』、第68・69巻『スウェーデン国の記』。

デンマークへは1873.4.18から23日まで滞在。1864年領土を巡りプロシヤ・オーストリー連合軍に敗れ、領土を割譲したとはいえ国力の回復に努めていた時で、久米も国民自主の気概を記す。国王と謁見し、長崎と上海を結ぶ海底電線を施工したデンマークの海外電信会社主催の晩餐会に招かれたほか、博物館、海軍造船所等を見学。

トピックスは世界史に影響を与えたヴァイキングの発祥と展開、進んだ社会保障制度成立の背景に十九世紀中葉、国民の価値観を培った国民的詩人で牧師グルントヴィイが存在したことと併せその発展過程と現状を学ぶ。日本との関係では内村鑑三『デンマルク国の話』が意外と今でも傾聴に値する問題を指摘。

スウェーデンには四月二十三日から三十日まで。グスタフ一世との謁見、水都ストックホルムの王宮離宮に国王仕立ての蒸気船で湖水の景勝観賞。海軍工廠、博物館、造船所、製材所、マッチ工場、製鉄場等のほか、小学校を見学し、初等教育の無償実施の実状と教育科目を体系的に説明報告。

トピックスは、スウェーデンの社会保障制度と租税負

担、現在の経済概況と将来的課題、オンブズマン制度、ノーベル賞の創設経緯のほか、使節団帰国六年後、スウェーデンのヴェガ号探検隊が北極海を経て日本に約二か月滞在し、内地旅行、日本との交流を深めた記録を紹介(『ヴェガ号航海誌』1988年邦訳)。その中の「この素晴らしい国と気高い国民は―中略―ヨーロッパの科学、産業、芸術に新たな土壌を用意してくる発展が進行中―云々にふれ、現代日本のあり方が記述とかなり阻隔があるのではと思わせられた。

(大森 東亜)

■第三回

六月十八日開催、Ch.3 Political Conditions in Japan

の章で Satow は日本の政治体制について論じている。

第三章の各段落の要約を示し、最後に全体の論旨をまとめたレ

Sir Ernest Satow, A Diplomat in Japan 輪読会

担当幹事 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

y-iwasaki@isr.or.jp



ジュメを参加者に配布した。

第三章の論旨は、「従来の西洋人の見解は、日本の政治システムには、宗教上の皇帝であるミカドと世俗的権力者である将軍が存在し、明治維新の革命が起きた理由は無能な

将軍が、条約締結によって神聖な国土を『野蛮人』の侵入で汚し、将軍に貿易の利益を独占させたと不満に思う大名と将軍との間に政争が生じたからとしている。

しかし、明治維新の背景を考察すると、その起源は既に十二世紀に見いだされる。日本では世襲制度によってミカドの権力も将軍の権力も形骸化していた。実際に権力を行使していたのは将軍や愚鈍な大名ではなく、旗本あるいはそれ以下の家来から選ばれた実力派の奉行だった。

二百三十八年間の泰平の眠りが西洋人によって破られたとき、世襲制度に基づく愚鈍な幕閣では状況の変化に対応できなくなっていたので、より相応しい人々に道を譲らなければならなくなっていた。これが明治維新の背景である。

なお、日本では十二世紀には既に権力の形骸化が見られたとする Satow の見解について、Satow が先行する日本研究者として名前を挙げているエンゲルベルト・ケンペル

[Engelbert Kaempfer 1651.9.16 - 1716.11.20] ドイツ北部レムゴー出身の医師、博物学者。初めて体系的に記述した『日本誌』の原著者として知られる。日本には、聖職的皇帝(天皇)と世俗的皇帝(将軍)の二人の支

「配者」がいると紹介した」の影響があるか否かについて、今後、英語訳の『日本史』(The History of Japan)を調べて検討することとした。残った時間で富岡製糸場の設立にかかわったフランス人、ポール・ブリュノーを紹介した。次回担当の際にはSatowと同時代に来日した外国人について紹介したいと考えている。(檜原 知子)

■第四回

七月十六日開催、Ch. 4

Treaties--Anti-Foreign Spirit--Murder of Foreigners

第四章は1836年からサトウの横浜着任(1862.9.8)直前まで、即ち生麦事件(9.17)直前までの日本の状態が描かれている。開国と通商に伴う権益を求めて来日した列強の武力に圧倒されて、幕府は多くの不平等条約の締結を余儀なくされ、かつ国内統治の権力低下に伴い、尊王攘夷の武士による多くの外国人の殺戮の嵐が吹き荒れて、幕府はこれに対して多額の賠償金を諸外国に支払うこととなった。

幕府は鎖国の維持という自己の立場を固めるべく、天皇に対して条約の裁可を請願した。この行動は権力の衰退を顕著に表すものであって、長年維持してきた施政権の献上(1867.11.9)と王政復古(1868.1.3)、徳川幕府の終

焉につながってゆく。この間にイギリス、ロシア、フランス、オランダも来航し、幕府の弱体化に便乗して有利な通商条約を締結している。

将軍家定の後継者慶福(家茂)の決定に際して、大老は反対者を強制的に引退させたため、不満と憎悪が高まった。その責任者、井伊直弼の暗殺(1860.3.24)という結果となった。

この後、明治維新政府が樹立(1868)され、フルベッキによるブリーフ・スケッチ(1969)を得ていたものの、日本の立ち位置を認識し、あまねく諸外国の情報を取得する目的で岩倉使節団が1871年に派遣されている。新しい日本の巢立ちである。

前章までの記述は伝承とサトウの調査からもたらされたものであるが、日本着任後の当章からの文章は臨場感に満ちて、より闊達になった気配が感じられる。(市川 三世史)

■第五回

九月十七日開催、Ch. 5

Richardson's Murder- Japanese Studies

第五章のテーマは、リチャードソン殺害事件と、サトウの日本語学習である。リチャードソン事件は、「生麦事件」として知られて

いる。1862.9.4(文久二年八月二十一日)に神奈川近郊の武蔵国生麦村(現、横浜市鶴見区)で、薩摩藩士たちがイギリス人商人リチャードソンら四人を殺傷した事件で、リチャードソンは絶命した。この日、外国人遊歩許可区域にある川崎大師の見物に出かけていた騎乗の四人が帰洛途中の島津久光一行に生麦村で出くわした。島津久光は、公武合体と攘夷を幕府にもとめる勅使に随行しての帰りであった。騎乗の四人を主君への無礼とみた薩摩藩士たちが斬りかかったのである。激高した横浜在留外国人たちは実力による報復を主張したが、イギリス代理公使ニールは外交交渉による事件解決をはかった。二十五年を経て回顧したサトウはニール公使の策を最上のものだったと評価している。

日本への鉄道の導入に尽力した伊藤博文は関心をもって見ていたと推測するが、実際には工場や機械の製造能力は詳細に記述されているものの、物流や輸送能力については殆ど記述がない。使節団にとっては製造、マニユファクチャリングという「モノ作り」そのものが関心の対象であったようだ。そのため、貨車の操車場、貨物列車運営、運河船舶輸送運営などの生産を支える物流ロジステックス

だと考えていたサトウにとって、日本語学習に成果が上がったことは大変喜ばしいことであった。(斉藤 恵子)

関西支部報告
担当幹事 難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■第七十四回

六月十四日開催、出席者七名、第39巻チェスター州(正しくは「チェシャー州」) 地元のジェン

トリー階級の名士であり政界にも基盤を持ち、不動産業で実業家としても成功

したトールマッシュ氏の案内で岩塩坑の見学に出かける。汽車に乗り遅れたため馬車で疾走しあまり遅れることなく到着して、一行を丁寧に迎える準備をしていた人々を驚かせる。

英国はその後の二度の大戦でも国の執るべき路を誤ることなく勝ち抜き、一方では多くの植民地を的確な判断で手放しながらも、今に至るも民主主義国家の代表として命脈を保っている。謂わば「堂々たる斜陽国家」として世界に存在を示し、同時に成熟国家としてそれなりの役割を世界の中で果たしている。

の記述は見当たらないのか。

■第七十五回

七月十三日開催、出席者七名、第39巻チェスター州

使節団は英国をスコットランドまで脚を延ばして隈なく視察し、回覧実記は最終の巻、第39巻を残すのみとなった。使節団が英国を訪れた1872年、その時は大英帝国として頂点を極めた年であり、まさにそのタイミングにその偉大なる英国を観たのである。(資料配布「岩倉使節団訪英以後の英国の大不況を示すグラフ」)

日本も国家として英国のように斜陽化への路は避けられないと思うが故に、日本も同じように世界の中で成熟国家として存在し、安定した国家の路を歩んで行くうえで多くの示唆を英国の歴史から学ぶことが出来るのではないかと考え、そのヒントを実記の二世紀末の英国に探ってみた。(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹
〒190-0001
東京都立川市若葉町 1-24-30-7111
E-mail: info@iwakura-mission.gr.jp
TEL/FAX 042-534-9295
- 入会申込**
入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります
<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2014年11月～12月の予定です

☆秋の全体例会

- 日時：10月26日(日) 13:15～16:45 (開場13時)
第1部 会務報告 13:15～
第2部 講演会 14:30～
講師：平川祐弘氏
*比較文化史、東京大学名誉教授。著書に「日本人に生まれて、まあよかった」
テーマ：岩倉使節団はどのような西洋知識をもって米欧回覧に向かったのか
場所：学術総合センター会議室
千代田区一ツ橋2-1-2 (如水会館となり)
会費：2,000円(学生1,000円)
懇親会：[新世界菜館] 神保町交差点 4,000円

☆実記を読む会

- 日程：11月13日(木) 14:00～
12月11日(木) 14:00～ 終了後忘年会
場所：国際文化会館401号室
会費：1,000円

☆Sir Ernest Satoh, A Diplomat in Japan 輪読会

- 日程：11月19日(水) 14:00～ Ch.7 樫原氏担当
12月17日(水) 14:00～ Ch.8 水谷氏担当
場所：日比谷図書文化館(会費：1,000円)

☆グローバルジャパン研究会

- 日程：11月8日(土) 18:00～20:30
テーマ：新しい教育を目指して一中高一貫教育校実験物語(高橋正尚氏)
場所：国際文化会館401号室(会費：1,000円)

☆i-café-music

- 場所：シェア奥沢
世田谷区奥沢 2-32-11 (最寄り駅自由が丘)
日程：第2回 11月30日(日)
第3回 12月21日(日)

☆関西支部

- 日時：10月26日(日) 14:00～16:00
テーマ：『実記』輪読、グローバルヒストリー研究会
場所：大阪弥生会館

編集後記

◇本年の新年会、数回の「i-café-music」と音楽を介して岩倉使節団や『実記』を広める新しい企画がスピード感をもって実現しそれぞれが成功裡に運んでいるのは、岩崎・植木両幹事の人脈とパワフルな行動力のたまものです。来年の新年会の盛会も間違いなくでしょう。

◇岩崎氏から、個人の異業種交流会でDVD米国編の上映会を開催した際の参加者の感想が届きました。「眠っていた視覚と聴覚の神経が激しく揺り動かされ、10年前にタイムスリップしました」「現在を享受できることは、国連の一大転機となった使節団の派遣に帰するものではないだろうか」「一番の驚きは、まだ子供である女の子を随行させ、その方が大きな実績を残され、他の若い随行者も大きな結果を残されたことです」などごく一部ですが紹介いたします。

◇i-project20については小野幹事が呼びかけた「岩倉使節団の群像」に挑む壮大な出版企画が動きだしています。連動した情報発信も必要と、メディア委員会を強化することになりました。メンバーに名乗りを上げた方々は皆I.Tに強く新展開が期待されます。